

## 沖繩の誇りかけた戦い

米軍普天間飛行場（沖繩県宜野湾市）の名護市辺野古への県内移設を最大の争点とした16日の沖繩県知事選は、県内移設に反対する翁長雄志おながたけし氏（64）が、移設推進と政府との協調による沖繩振興を訴えた現職の仲井真弘多なかいまひろかず氏（75）ら3氏を破って初当選した。次点の仲井真氏と約10万票の大差がついた選挙結果は、沖繩県民の県内移設反対の意思と、振興策とセットで基地を押しつけてきた政府の手法への拒絶を明確に示した。条件闘争の末に「苦渋の選択」で基地を容認した沖繩は、もう過去の姿だ。地殻変動を思わせる沖繩の民意の変化に、政府、そして総選挙を迎える私たちヤマトンチュ（本土の人）は真摯しんしに向き合わねばならない。

「うちなーんちゅ、うしえーてーならんどー」。今月1日、那覇市の野球場に1万人を超える支持者を集めた総決起大会で翁長氏が叫んだ。「沖繩の人間をばかにしてはいけない」という意味の沖繩方言だ。私はこの叫びに県民が知事選に込めた思いを感じた。県民にとってこの選挙は「沖繩の誇り」をかけた戦いだったのだ。

## 保革の壁越え声あげた県民

沖繩の民意の変化の発端は、普天間飛行場の移設先を「最低でも県外」と掲げた2009年の鳩山由紀夫政権誕生にある。首相の発言に高まった期待は、政権の辺野古回帰で裏切られ、保守革新を問わず過重な基地負担を「差別」ととらえるようになった。

12年10月の米軍輸送機オスプレイの沖繩配備、そして13年4月28日、「主権回復の日」を記念した政府主催式典は、沖繩の被差別感情を強固にした。「主権回復の日」は日本が占領下からの独立を果たしたサンフランシスコ講和条約発効から61年の日だが、条約発効によって米国統治が合法化された沖繩にとっては、本土から切り離された「屈辱の日」だ。政府式典に「がっていんならん（合点がいかない）」と県民は憤った。

決定打は沖繩のリーダー自らが放った。前回知事選で「県外移設」を公約して当選しながら昨年末に辺野古沿岸部の埋め立てを承認した仲井真氏だ。安倍晋三首相に多額の振興予算を示され「いい正月になるなあ」と絶賛し、2日後に埋め立てを承認した。「沖繩はカネをつぎこめば何とかなる」と言わんばかりの政府と、それに乗ったとしか見えない知事の姿に、県民の誇りはズタズタにされた。決起大会での翁長氏の叫びは沖繩の民意を一顧だにしない政府と仲井真氏に対する怒りのうねりに根ざした言葉だ。

そのうねりを、私は8月に辺野古のキャンプ・シュワブゲート前で開かれた集会に見た。辺野古のボーリング調査に着手した政府への抗議に、約3600人が集まった。那覇市から高速道路を使っても1時間半かかる地に、子供の手を引いた家族連れがたくさんいた。これまでにない光景だった。那覇市から子供2人を連れて参加した男性（45）は「自分は左でも右でもないが、沖繩で普通に生活している一人としておかしいと声をあげなければいけないと思った」と語った。保守と革新が共闘して翁長氏を支える新たな政治の潮流は民意の変化が生んだのだと確信した。

当選直後のあいさつで翁長氏は「県民が私たちより先を行っていて、私たち政治家がそこにたどり着いた時、沖繩の政治が動き出した」と語ったが、その通りだと思う。

## 「カネで懐柔」もう通用せず

辺野古移設を「過去の問題」で「知事選の争点にならない」と片付けようとした菅義偉官房長官の言葉は、県民の怒りの火に油を注いだ。建設会社社長、照屋義実さん（67）は言う。「負担軽減を言いながら戦後69年間も基地を押しつける政府に言いたい。『いつまでも見え透いた芝居をしないでよ』と。カネをつぎこんで沖繩を懐柔してきた政府のやり方はもう通用しない。本土の人たちには沖繩の現実をしっかりと分かってもらいたい」

保守系政治家として自民側の知事選候補者に名が挙げたこともあり、米軍基地が町面積の約83%を占める嘉手納町の町長を20年務めた宮城篤実さん（78）もこう話した。「沖繩県民は基地問題で思い悩み苦しんできたが、もう元に戻ることはない。本土の方々には一方的な基地負担を今後も続けて日本という国が成り立つのか考えてほしい」

数万人規模の県民大会を何度開こうとも耳を貸そうとしなかった政府・本土に対し、沖繩県民は県内移設反対の知事を初めて誕生させた。沖繩にとってこれ以上の答えはない。

政府は辺野古移設計画を白紙に戻し、普天間飛行場の県外移設を検討すべきだ。

